



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	美術科が考える「深い学び」への取り組み（各教科が考える深い学び）(fulltext)
Author(s)	中村,翔太郎
Citation	教育と研究 / 東京学芸大学附属世田谷中学校(45): 17-20
Issue Date	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/2309/149060
Publisher	東京学芸大学附属世田谷中学校
Rights	

美術科が考える「深い学び」への取り組み

美術科 中村 翔太郎

1. はじめに

平成29年3月に告示された新たな学習指導要領では、学校教育全体において育成を目指す資質・能力が明確に示され、以下の三つの柱として整理されました。

- ①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

「何ができるようになるか」という視点からこれらの資質・能力が示されたわけですが、それを踏まえた上で実際に問われてくるのは、「どのように学ぶか」という授業レベルでの改善です。資質・能力を育成するために学校現場ではどのような取り組みをおこなっていくのか、その具体的な内容が求められます。その中で重視され

ているのが「主体的・対話的で深い学び」です。

とはいえ、〇〇すれば□□の資質・能力が身につく、などという簡単な話ではありません。むしろ、そのような形骸的な改善策を打ち立てるだけで終わらないようにするために「深い学び」という文言が加えられているとも考えられそうです。「深い学び」については以下のように示されています。

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

つまり、学習過程において「見方・考え方」を働かせて中身のあつ活動としていくこと。そこからは、教科で与えられた課題を作業的にこなすのではなく、自分側に引き寄せて学んでいくというよう

な活動風景が浮かびます。

そのために美術科は、授業においての具体的な改善としては、活動への入り方（取り組む内容の示し方）と、活動内での支援のあり方を変えていくべきではないかと考えています。また、生き方や生活面からのつながりを感じさせながら、美術を学ぶことの必然性を自覚できるような要素も必要です。

2. 美術という教科と「見方・考え方」

具体的な取り組みを示す前に、美術という教科について触れておきます。

まず、美術でよく誤解されがちなのは、何かしら作品をつくることだけが目的と思われることです。故に、そのための技術的な内容を学ぶ教科ととられることも少なくありません。

たしかに活動としては、あらわすこと（表現）とみること（鑑賞）で構成されています。しかし、それらの行為の内容には実に多くの要素が詰め込まれています。想像したり発想したりすることや、ひらめいたアイデアの組み合わせからどうすれば実現できるかを考えること、実際に手を動かす中で試行錯誤したり、他者との関わりを通してより良い方向性を見つけたりすること、自らの活動を振り返って次につなげていくことなど、挙げればきりがありません。

美術はこうした過程で創意工夫を学んでいくことを活動の軸とされている教科であり、つまりは自らで価値を生み出していくこと、創造性を育むことに直接的に関わっているのです。

また、美術科では「造形的な見方・考え方」として、

感性や想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分なりの意味や価値をつくりだすこと

として説明されています。ただ作品づくりの教科ではなく、創造性を育む教科であることはここでも明確です。

感性はよさや美しさなどの価値や心情を感じとる力であり、造形的な視点というのは、対象を捉えるために働かせている視点をより色や形といった観点で解釈したものと考えられます。例えばリンゴをみるという行為にしても、前者であれば作り手の感情や大切に育てたのだろうという想像、後者であれば色味や明るさや鮮やかさ、形の特徴や表面の質感、置かれている空間あるいは余白などといった様々な要素を見出すことができます。ただ漠然と眺めるのではなく、こうした要素や働きに注目して捉えることで、他の対象や事象へと思考を広げたりつなげたりすることも可能にしているの

です。そしてこれらの「見方・考え方」は、教科の学習の中だけで完結するのではなく、実際に社会に出て生活をしていく上でも生きてくるといえます。

3. 具体的な取り組みから考える

(1)活動の概要

ここでは3年生でおこなった「いきものすがた」という題材を例に考えていきたいと思えます。この題材は、簡単に言うとコラージュの技法を用い、生物の特徴的な形や質感に着目してあらわしていく活動です。活動の流れとしては大まかに以下の通りです。

- ・ エリックカールの作品を鑑賞する。(生物の描かれ方や質感の表現の面白さに目を向けさせる。)
- ・ 動物や魚、鳥などの図鑑や写真資料を見比べる。(実際の姿と描かれた姿との違いを感じたり、鱗や毛並みなどの質感などを意識的に見たりする。)
- ・ 自分が気になった生物を選び、何点かイメージスケッチを描く。(特徴を生かしながら画面に収めていく。)
- ・ 材料や用具の組み合わせを考えながら、質感を表現する方法を工夫し、素材をつくっていく。(はじめにいくつか例は示す。)
- ・ 何枚かできた素材から使いたい

部分を切り取り、画面上で構成しながら生物の姿をあらわしていく。(できた素材の特徴から改めて生物を考える生徒もいる。)

(2)「深い学び」へのつながり

この授業でのポイントとしては、活動に入っていく際に、描かれた姿(絵)と実際の姿(写真)の両方を見て、造形的視点からの差異に着目できるようにしている点がまず一つです。このことによって、表現の内容を教師側から一方的に提示するというよりは、みるという行為の中から「こういうふうに羽毛の質感を表しているのか」などと半ば自然に活動へ臨むことができると考えます。活動の見通しを立てて取り組むことにもつながるとともに、主体的に学ぶためのきっかけとしても期待できます。

二つめとしては、活動が一方ではなく、試行錯誤の機会を多く含んでいる点です。この授業ではコラージュの素材も自分自身でつくる時間を設けてあります。例えば、鳥の羽の質感を表現したいという生徒が、ひとまず色鉛筆やパステルを重ねることで柔らかい感じを試そうとします。実際に手を動かしていく中で、何気なく選んだ材料でも重ねる順や色の選択、ストロークの引き方によってあらわれる質感が変わってくることに

気付きははじめます。そういった行為を繰り返していくことで、紙を違うものにしたらどうだろうか、友達にアドバイスをしてもらおうか、などといった新たな工夫が生まれてくるのです。

また、そのように工夫して表した素材から、新たに発想が生まれることもあるでしょう。本来は鳥の羽の質感を出すために試していたが、思いもよらず魚の鱗のような質感が描けたとします。はじめに思い描いていたものではないが良いものができたからこれを生かしたい、となったときにそれを受け入れる余地があるのも美術という教科の懐の深さだと感じます。「造形的な見方・考え方」においても「自分なりの意味や価値をつくりだすこと」という文言がありますが、これはまさに試行錯誤を重ねていくからこそ見出だせる面でもあります。

(3) 振り返ることの重要性

どんなに様々な活動をおこなったところで、振り返るという行為なしには意味や価値として成立しないように思います。これは美術科としてこれから考えていかなければならない重要な点です。現在、本校の美術では生徒一人ひとりがクロッキー帳を所有しています。ここに思いついたアイデアを書きためたり、思い描いたイメー

ジを絵によって残したりしていません。また、授業でのワークシートや感想、反省点なども記録するようにしています。

振り返るという活動は、自らの行為やこれまでの取り組みを少し離れた場所から捉えなおすことです。その行為の真っ只中では気づかなかったことや見落としていたようなことが、距離をおくことで浮かび上がり、新たな価値として発見される機会でもあります。先ほど述べたような試行錯誤も、短いスパンで振り返ることで成立しているとも言えますし、授業においては生徒が作品だけで終わらせないように、過程に目を向けるようにするためのツールともなります。振り返ることは、全ての学びにおいて欠かせない行為であるとともに、「深い学び」においてはより際立って重要な鍵であると考えています。

4. おわりに

学びの深さとは、決して授業内だけで生まれるものではないでしょうし、生徒の取り組む姿や発言、作品や制作過程の記録だけで判断できるものでもありません。生徒はもちろん教師も含め、常に過程にあるという意識のもとで変化・更新させていく柔軟さを大切に、取り組んでいきたいと考えます。